
さくらさくら 2

サイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さくらさくら2

【Nコード】

N1038Y

【作者名】

サイ

【あらすじ】

耳に届いた自分の声が優しく、まるで愛の告白をしているよう
だと思う。

年上の幼馴染さくらと彼の微妙な関係。

（前書き）

前作「さくらさくら」を読んでいた方が、わかりやすいかと思えます。

勝手知ったる月島家の玄関を開け、「とおるーっ」と大声で呼ぶ。夏休み明け提出のレポートで、使う予定だった専門書を一冊忘れてきたとかで、似たようなのを持っていないかと携帯に連絡がきたのだ。自分の本棚を確かめながら、いくつかタイトルと著者名を伝えようと、全部読んでみたいと返ってきた。

ついでに、レポート内容や持って帰ってきた資料の話が盛り上がり始めて、じゃあ、これから持っていくから直接話そうぜ、ということになったのだった。

「あがつてきてください！」

そう叫び返されて、遠慮なく上がり、二階の透の部屋へと向かう。階段を上がりきると、奥の部屋からさくらが顔だけ出して、いらっしやい、と笑った。

「ねえ、そっちの用がすんだら、声かけてよ」

長い髪は上にあげられて、華奢な首が見えている。扉の陰から少しだけのぞく肩は丸出した。だからこそ体を隠しているのだろうが、その向こうでどんな格好しているのやら、それはそれで想像力をかきたてられて、迷惑この上なかった。

そりゃあ、自室なんだから、真っ裸でいようと、さくらの勝手なんだが。

このごろのさくらは、子供っぽさが抜けて、あか抜けてきて、ますますきれいになった。惚れてる自覚のある身としては、直視にたえられない。目の毒すぎる。

もういいかげん我慢の限界だ。

さくらに見惚れながら、そう思った。

もう少し、あと少しだけと、別れを先送りにしてきたけれど。ここらが潮時なんだろう。

それは、今がいいんじゃないか。

俺は不意に何の脈絡もなく、今まで散々迷って先延ばしにしていたことを、心に決めていた。

決意を秘めて、本を抱えなおして、何気なさを装ってさくらに答える。

「こっちは時間がかかりそうだから、先に聞くよ。何？」

「えーと、ちよっと待って」

さくらは考える素振りを見せて、部屋の奥へ戻っていった。がっさがっさと散らかる音がして、すぐに戻ってくると、今度は廊下に出てきた。

紺地のタンクトップとホットパンツの部屋着の上から、透けた上着を羽織っている。足は腿の付け根まで出ているし、上は体の線が露だ。日に焼けた様子のない肌は白く浮かび上がって見えるのに、健康的で瑞々しい。日常着なのだろうに、見事に男の劣情を煽る格好だった。

俺は身動きもままならず、その肢体を眺めていると、その『女』が間を詰めて、微笑んで上目遣いに見上げてきた。つやつやしている唇が開かれて、その艶かしさにぞくりとする。

「ねえ、これ、前売り買ってきたから観に行こうよ。再来週の木曜日から公開だから、その次の土曜日か日曜日、どう？」

無邪気な声と共に細い指が差し出したのは、確かにこの前、見たいと話した映画のチケットだった。

瞬きしてみれば、目の前にいるのはいつものさくらで。俺のことなど、弟としか見ていない女で。

「あの、さ」

なんだか笑えた。自分を嘲笑した。そのままの勢いで、軽く言う。「俺を誘うなよ。彼氏と行きゃあいじじゃん。趣味が合わないって言うんなら、透でも、友達でもいいけどさ」

「え。だって、見たがってたじゃない」

「うん。でもさ、いろいろ誤解されるから。俺を誘うのは、もうやめろって」

さくらは、むつとした顔をした。

「そんなのは気にするなって、言ってるでしょ。勘繰る人は何してたって勘繰るし、そんなの色々相手にすることないよ」

ずっと、さくらはそう言ってきた。どうでもいい誰かの目を気にして、どうして私たちが離れていなきゃならないのって。

嬉しかった。他の誰より俺を優先してくれる。すごく愛されているのを、いつも実感していた。

おじさんやおばさんや、実の弟の透と比べても遜色ないくらい。まるで本当の家族のように。

俺にも、さくらに対して似た気持ちはある。人生の半分以上を、さくらと過ごしてきたのだから。

だけどそれ以上に、俺にとって、さくらは『女』だった。

誰よりも。他の誰とも比べられないくらい。心惹かれてやまない女。

そして、けっして思いの届かない人。

それでもしかたないと思っていた。さくらと違う思いを寄せているのは、俺の勝手だ。

さくらの、全身全霊で弟として愛してくれる純粋な気持ちを、十数年以上も注いでくれた愛情を、否定して、傷つけたりしたくはなかった。

でも、苦しくて。ずっと、苦しくて。時が経つほどに、思い出が重なるごとに、もっと気持ちは大きくなって、捨てることもできなくて。

今も、欠片の警戒もない信頼しきつた無防備さに、愛しさと同時に、胸が引き裂かれるような痛みを覚えている。

この思いを胸の中から抉り出して、引きちぎって捨ててしまえばいいのにと、思わずにはいられないほど。

「俺たち、もう、それで許される歳じゃないだろ」

穏やかに伝える。感情のままにぶつければ、さくらはすぐに売り言葉に買い言葉になってしまっから。けれど、さくらは興奮して早

口に言い募った。

「許すって？ 誰に何を許してもらわなきゃならないの？ 自分の気持ちまで、誰かに指図されるつもりはないよ」

「でも、俺はうんざりなんだ。さくらの男に難癖つけられるのも、俺の彼女にヒスおこされるのも」

「そんな女、ふりなさいよ！」

俺は思わず、くくつと嫌な笑いをこぼしてしまった。

なんだそれ。それこそ、ただの『姉』に、そんな指図をされるいわれはない。

「勝手なこと言わないでくれ」

閃くような怒りと共に吐き出した声は、自分でも驚くくらい冷たく響いた。

さくらが目を見開いて、怯んだ表情を見せる。でもそれは一瞬で、すぐにキツと睨みつけてきた。

「じゃあ、なに、どこかで会っても、他人のふりしろっていつの？」

「そのとおり」

「それで家では今までどおりって？ どうしてそんなふうに、こそしなきゃいけないのよ。そっちの方が」

「それもなし」

途中でおおいかぶせるようにして、言葉を奪う。さくらは俺の言葉の真意を推し量るように黙って、すぐに口を開いた。

「はあ？ じゃあ、いつ」

「もう会わない」

さくらは信じられないという顔をして、今度こそ絶句した。そこにたたみかける。

「血も繋がっていないような弟が、他の男のものになった女に会うのは、ルール違反だ」

「なに言ってるの。血が繋がってなくなたって、みゆき弥由毅は弟だよ！ 一生——」

言い切りやがったな——！！

「弟じゃねーよ」

「弟だもん！ 弟でしょ！？」

必死に虚しい言葉を重ねるさくらに、俺は急に冷静になって、苦笑するしかなかった。

「気持ち嬉しいけどさ、俺は単なる幼馴染なんだよ。今じゃ妙齡の男なの。それを、まあ、彼氏ぐらいならいいけどさ、でも、結婚するとして、旦那になる人に、なんて説明するの」

「弟に会うなんて言う心の狭い男は、こっちが願い下げって、何度も言ってるでしょ」

「それ、同じこと、旦那になる人の親にも言える？」

さくらは何か言おうと唇を動かして、だけど言葉が出てこず、泣きそうな目で黙り込んだ。

いつだって強気ですぐに怒るけれど、それは本当は、さくらが繊細で優しくて弱いから。それに単純で正直だから、すぐにこうやって顔に出てしまう。

こんな顔させたくなくて、弟をやってきたけれど。

ごめん。俺、弟をやめる。

まるでさくらのためのように言っているけれど、違うことは自分がよくわかっている。

俺のために、さくらの心を踏み躪る。

「そんな子供の理屈、いつまでも通らないよ。だから、もうやめよう」

「弥由毅」

泣きそうちに情けない声で名前を呼ばれる。

「うん」

それに、微笑んで頷いてみせた。

「今までありがとう、さくら」

呆然とした様子のさくらに背を向け、透の部屋に、顔だけ出す。透は開け放した扉から全部聞いていたようで、珍しく顔をしかめていた。

「これ、さつき話したやつ。夏休みが終わるまでに返してくれればいいから」

そう言って、床に本を置く。

「悪いけど、今日はこれで帰るわ」

軽く手を挙げ、透の部屋を出た。さくらはまだそこに立っていたけれど、俺は無視して階段を降りた。

降りきって玄関に向かったところで、二階ではたたと足音がした。上から怒鳴りつけられる。

「弥由毅のばかつ。あんたなんか、もう知らないからあつ。絶対、絶対、知らないんだからあつ」

涙に裏返った声に、思わず振り返ってしまえば、手すりの一番上から身を乗り出して、縋るような目でさくらが泣いていた。

なんて、かわいい女だろう。愛しさに胸が疼く。

「うん。それでいいよ」

耳に届いた自分の声が優しく、まるで愛を告白しているようだと思う。

さくらの顔が、悲しげに歪んだ。

それを目に焼き付けて。

俺はさくらに、さよならを告げた。

(後書き)

続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1038y/>

さくらさくら2

2011年11月7日03時29分発行